

子どもの本だな 55

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

### どうながのプレツェル

マーグレット・レイ ぶん H・A・レイ え  
わたなべ しげお やく (福音館書店)

プレツェルは世界一胴長のダックスフントです。ドッグショーで優勝し、誰もが感心するなか、グレタだけは知らん顔。プレツェルはグレタに結婚をもうしこみますが、「胴長なんて大嫌い」と言われてしまいます。大きな骨やきれいな緑色のボールをあげても、グレタは見向きもしません。パンのプレツェルのように体を丸める芸当を見せても、答えは同じです。ある日、ボールを追いかけていたグレタが深い穴に落ちました。プレツェルは長い胴を伸ばし、グレタを助けました。

そして、グレタは「胴長だから結婚するんじゃないのよ」と言って、2匹は結婚しました。

プレツェルのユーモラスな姿が明るい色合いで描かれ、ストーリーの楽しさを増しています。見開きいっぱい伸びるプレツェル自慢の長い胴が印象的です。読んでもらえば4歳から楽しめます。(竹内)

### くまのテディ・ロビンソン

ジョーン・G・ロビンソン さく・え  
坪井 郁美 やく (福音館書店)

デボラは小さな女の子です。デボラとぬいぐるみのくまのテディ・ロビンソンは大の仲良しで、どこへ行くのも一緒です。初めて入院した日の夜、デボラはテディ・ロビンソンのおかげでぐっすり眠ることができました。数日後、デボラは隣のベッドに入った女の子に、テディ・ロビンソンを貸してあげました。ところがテディ・ロビンソンは、夜中に泣き出した赤ちゃんに手渡され、強くひっぱられて耳が取れそうになります。耳をなくさないよう、デボラは思い切って取ってしまいました。片耳になったテディ・ロビンソンは、看護婦さんに本物の包帯を巻いてもらい、大喜びです。(「テディ・ロビンソン入院する」)

テディ・ロビンソンが迷子になったり池に落ちるハプニングも、テディ・ロビンソン作のゆかいな歌や子どもらしい発想で、楽しみながら解決します。幼い子どもの願いや喜びなどが、日常の出来事を通して穏やかに描かれています。続編に『テディ・ロビンソンまほうをつかう』があります。読んでもらえば4、5歳から。(池田)

5月	6月	5・6月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
10日	7日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
17日	14日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
24日	21日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

### お知らせ 絵本の交換会

家でもう読まなくなった絵本はありますか？図書館に持ってきてくだされば他の方の絵本と交換できます。

**6月2日(土)**  
**10:30~16:00**

・場所：図書館読書会室  
\*傷みのひどい本、落書きあり、漫画などは交換できません。

『消えたベラスケス』 ローラ・カミング 著 五十嵐 加奈子 訳

柏書房 368頁 2018年1月刊 2,500円 (請求記号)723.3

1845年、ロンドン郊外の町レディングで書店を営んでいたジョン・スネアは、閉鎖する学校のオークションで、「チャールズ一世の半身像」をわずか8ポンドで手に入れた。ここからスネアの人生は思わぬ方向へと転がっていく。

この肖像画のチャールズ一世は若く皇太子時代の姿をしていた。ヴァン・ダイク作となっていたが、ダイクがイングランドに来たのはチャールズが王になった8年後であることから、スネアはダイクの作品ではないと考えた。独学で絵を学ぶほどの絵画の愛好家で、自身のコレクションや店の本の図版などを多く見ていたスネアは、ある書物の記録にあった、「ベラスケスが1623年に描いたチャールズ皇太子の肖像画」だと確信し、立証するため調べ始めた。スネアは、様々な古書や新聞記事や記録を調べ上げ見解を示した小冊子を発行し、小さな展示会を開いた。この絵は評判を呼び絶賛されたが、それ以上の愚弄や批判がスネアを襲った。さらに、スネアが小冊子でとりあげたことから、過去の所有者と考えられるある伯爵の遺産管財人からその絵は盗まれたものだと訴えられる。根拠のない訴えだったため絵は取り戻すことができたが、この事件で人々の信頼をなくし、店も財産も家族も失った。しかしチャールズ一世の肖像画だけは決して手放さうとはしなかった。

著者は、スネアの「小冊子」を図書館で偶然見つけた。ベラスケスの絵に対する彼の思いに心打たれた著者は、「チャールズ一世の半身像」とジョン・スネアとの数奇な人生を追い始める。1枚の絵に魅入られ人生を狂わせたスネアの生涯と、謎に包まれた宮廷画家ベラスケスの生涯が徐々に解き明かされ、著者は真実にたどり着く。

ほかに、マネやピカソなど多くの画家を魅了し続ける画家ベラスケスの数々の名画の解説やその絵画論なども興味深く、画集とあわせて読むとより楽しめる。スネアが画家ベラスケスの絵と信じ、すべてを失っても手放さなかった絵とはどのようなものだったのか。その消息を知るすべがないのが残念でならない。

(池之上)

5月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
		X	X	3	4	5
6	X	X	X	10	11	12
13	14	X	16	17	18	19
20	21	X	23	24	25	26
27	28	X	30	31		

6月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	X	6	7	8	9
10	11	X	13	14	15	16
17	18	X	20	21	22	23
24	25	X	27	28	29	30

- \* カレンダーのX印は休館日
- \*  は館内整理日  
返却のみ受付  
(10:00~17:00)
- \* 開館時間は  
10:00~18:00  
金曜日は  
20:00まで開館

地下水

この4月から太子町立図書館で働くことになり、早速この地下水の原稿を書くこととなった。新生活が始まり、何もかもが探り探りの状況で何を書こうか大いに悩んだが、今回は図書館を利用する皆様に私という司書を知ってもらうために、自分自身のことを語りたいと思う。

私の幼少期は地元の図書館に入り浸り、毎日のように両親に絵本の読み聞かせをせがむ子どもであった。趣味はもちろん読書であり、小学生の頃には既に図書館司書になりたいと考えていたが、その夢を叶えるためにどのような努力が必要なのか漠然としていた。高校生になっても何学部に進学するべきなのか考えていない程のんびりとしていたが、『わたしのとくべつな場所』という絵本と出会い、社会福祉学部への進学を即決した。この絵本は、黒人の少女が「ある場所」を目指し、行く先々で不条理な扱いを受けるが、最後に「ある場所」である図書館に行きつき、「だれでも自由に入ることが出来ます。」という文字を見つめる、というお話である。この絵本を読んだとき、私がなぜ図書館で働きたいと考えるようになったのか、その理由が自分の中で明確になった。ただ単に読書好きで司書を目指した訳ではない。年齢、性別、人種問わず誰もが集まってくる図書館という空間そのものが私は好きである。

この図書館で働き始めて1ヶ月も経っていない新米の身ではあるが、太子町立図書館が多くの方にとってのとくべつな場所になるよう、誠心誠意努めていきたい。

(光藤)

